様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１６１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０３７０

研究課題名（和文）美術館におけるナショナル・アイデンティティの創出―アンシァン・レジームから革命へ

研究課題名（英文）Inventing the national identity in the museum - from Old Regime to Revolution

研究代表者
田中　佳（TANAKA, Kei）

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・准教授

研究者番号：７０５８６３１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,400,000円、（間接経費）　1,020,000円

研究成果の概要（和文）：フランス美術における愛国的な意識は、アンシァン・レジーム期から、流派、様式、主題、造型表現、展示方法などに確認された。しかし革命によって「過去」が否定の対象となると、革命の成果を称讃するイメージがそれらに取って替わった。1793年に開館するルーヴル宮の美術館は、この新しい国民のイメージを定着させ、革命の精神を視覚化する格好のメディアと期待された。だが担当の委員会の議論や展示内容と方法の分析からは、忌避すべき過去から継承したとみなされる点が随所に認められた。今回の検証から、開館時の美術館がナショナル・アイデンティティ創出に果たした政治的役割は限定的であったと結論づけられる。

研究成果の概要（英文）：From the Old Regime era, patriotic consciousness in French art was manifested in the idea of schools, styles, choice of subjects, mode of expressions, and way of displaying. Once the "past" was considered an evil during the French revolution, the images applauding the revolutionary success replaced the old one. The museum opened in 1793 at the Louvre Palace, was expected as a suitable media for fixing this new national image and visualizing the revolutionary spirits. For all this ideal pronounced frequently by the government, are explicit some rests of the detestable old customs in the discussions of the committees in charge and on the works and classification of the museum display. It should be concluded, from what has been examined by this study, that the political role of the museum, at least in the early stage, of inventing a national identity was rather limited.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：フランス史　西洋史　近世史　美術館　フランス革命　ナショナリズム　ルーヴル美術館

１．研究開始当初の背景

昨今の 18 世紀フランス史研究では、フランス革命を導いた要因を考察する過程でアンシァン・レジーム期の文化的変容に注目し、出版ジャーナリズムの発達と「公衆」による「世論」の形成をひとつの柱として、さまざまなレベルでの文化的慣習の変遷を分析対象とする傾向が見られる。新たな文化の担い手となった具体的な場としては、カフェやサロン、劇場などが取り上げられてきた。

ところが、「美術館」をこうした文脈の中で分析の対象とする文化史研究は稀である。そもそも美術館の創設過程そのものを対象とする研究自体が少なく、多くは建築物としての成立過程とコレクションの収蔵過程のみに注目しており、創設時の文化的・社会的背景については簡潔に言及されるに留まっている。このような中で、アンシァン・レジーム期から革命初期にかけてのルーヴル美術館計画の詳細を明らかにした Andrew McCLELLAN の研究（1994）と、革命期の文化遺産をめぐる言説や政策との関連で美術館政策を分析した Dominique POULOT の研究（1996）は、貴重な先行研究であった。

一方、近年の美術史研究では、作品や作家の研究に留まらず、それらをとりまく社会環境を対象とする研究が多く見られるようになり、コレクションや競売会、画商、ジャーナリズム、展覧会、批評などの側面がかなり明らかになってきている（CROW, 1984; POMIAN, 1987; WRIGLEY, 1993; EDWARDS, 1996; GUICHARD, 2008 など）。しかし、こうした研究の中で美術館の問題に迫るものは、依然としてごく少数であった。

そうした中で、研究者は文化史研究の立場から、アンシァン・レジームにおける美術全般の公開性の高まりと美術鑑賞者の台頭という社会的な側面に関心を持ち、ルーヴル美術館構想を事例として、アンシァン・レジームの美術行政と公衆の関係を問い直し、両者の間には双方的な関係が存在しえたという新知見を提示してきた。この過程で、美術行政と公衆の双方に「ナショナル」なものへの関心が強く表れてくることにとくに注目してきた。たとえば美術館への展示を前提として、フランスの歴史に題材を採った絵画と彫刻が注文され（「奨励制作」）、公衆もこうした主題を高く評価し、さらなる注文を求めるという現象が見られた。そこで採り上げられた主題は、各種アカデミーのコンクール課題、演劇作品の主題、歴史書の挿絵などとも共通していることが確認され、こうした関心が、当時の知識人のあいだで広く共有されていたことがわかった。

もっとも「国民意識」や「ナショナリズム」といった概念は、一般に革命の産物であり、革命期の各種祭典や制度を通じて確立されたと理解されている。しかしその萌芽は、すでにアンシァン・レジーム末期の美術館構想にはっきりと現れており、革命期に美術館が開館し、制度が整えられていく中で、共和国の政治的プロパガンダとの関係でさらなる変化を見せることになる。

このように本研究は、これまで研究者が一貫して取り組んできたルーヴル美術館に関する研究の中で着想した問題を発展させ、分析の期間を開館後の革命期にまで広げようとするものである。美術館の事例を通して、アンシァン・レジームから革命への文化の継承という包括的な問題に取り組むことも視野に入れている。

２．研究の目的

研究者はこれまで、ルーヴル美術館の創設案が 18 世紀半ばに浮上してから 1793 年の開館に結実するまでの経緯を研究し、アンシァン・レジームの社会・文化的文脈のなかで、美術行政と公衆との相関関係を分析してきた。本研究課題では、その過程で浮き彫りになったナショナル・アイデンティティの創出という美術館の理念および社会的機能に注目し、これがアンシァン・レジームから革命へとどのように引き継がれ、あるいは変質したかを解明し、フランス革命の理解に新たな視座を提供することを目的とする。具体的には、以下の諸点を明らかにしていくものである。

(1) アンシァン・レジーム期の「ナショナル」ものへの関心の芽生え

研究者はすでに、ルイ 16 世期の「奨励制作」に見られるフランス史の主題の内容と、同時代のさまざまな文化領域との関連について調査している。本研究では、これまでの分析対象としてきた作品、および同時代作品をさらに検証していく。加えて美術館計画に関わった主要人物たちの知的関心について分析し、美術館構想に影響を与えた可能性を探る。

(2) 革命期の美術館政策に見られる政治的意図

1792 年 8 月 10 日の王権停止後、美術館の開館・運営を担う委員会が組織され、具体的な議論を重ねていく。そうした中で、美術館に込められる政治的意図が、アンシァン・レジームからどのように変化したのか、また革命の進行に応じてどのように展開していくのかを、とくに「ナショナル・アイデンティティ」に関わる要素に注目しながら明らかにする。

(3) 革命期の美術館における展示とその効果

革命期の美術館に実際に展示された作品の内容を時期ごとに把握し、当局の意図がどのように展示に反映されていくかをまとめ

る。また、そうした展示に関して、鑑賞者がどのような印象を持ったかを、同時代の証言の収集から明らかにする。その結果、当局の意図がどの程度の効果を持ち得たのかを分析する。

以上によって、美術館を通して「ナショナル・アイデンティティ」が生成される過程を明らかにし、フランス革命前夜の文化的変容の流れの中に、美術館をめぐる動向を位置づける。

本研究には、従来の 18 世紀研究が注目してこなかった「美術館」を考察対象とする視点の独創性がある。アンシァン・レジームと革命の継承と断絶という伝統的なテーマに、美術館という斬新な切り口から取り組むことは、まったく新しい側面の提示できる可能性がある。とりわけ、「国民」や「ナショナリズム」といった概念が革命の産物であるという従来の理解を覆す新知見が期待される。

また、歴史学ばかりでなく、美術史や思想史、博物館史という隣接領域の研究成果と方法を多く採り入れることで、研究に広がりを持たせる点も強調しておきたい。とくに、手稿史料や文献資料と並行して美術作品の分析も行なう点は、歴史と美術史の双方の専門的知識を学んできた研究者独自の手法である。このような複数の領域にまたがる本研究は多方面の関心を惹くと考えられ、研究成果の適切な公開によって学際的な交流を促すきっかけを提供できるであろう。

本研究のように、「美術館」の問題を同時代の社会的・文化的状況と結びつけ、総合的な知見を提示しようとする研究方法は、世界的に見ても蓄積の浅い、きわめて先駆的な取り組みであり、今後の文化史研究、美術館研究に新たな方向を示すことが期待される。とりわけ、近世・近代ヨーロッパの中でもいち早く国家レベルで美術館計画を進めたフランスの事例は、他国の美術館をめぐる研究に対しても重要な参照対象を提供することになるだろう。またわが国においても、近年、博物館・美術館研究への関心が高まっているが、本研究はこうした流れにひとつの研究モデルを提示できると考える。

３．研究の方法

(1)アンシァン・レジームの美術館構想に見られる「ナショナル」なものへの関心については、すでに一部の研究成果を発表しているが、これに加えて、美術館構想に関わった主要人物たち（王室建造物局総監ダンジヴィレ、王立絵画彫刻アカデミー院長・王付き主席画家ピエール等）の知的関心の影響に視点を移し、彼らの蔵書目録（未公開史料を含む）や著作の調査を行った。

ピエールの財産目録については、パリ国立古文書館に所蔵されていたため、比較的容易に調査することができたが、ダンジヴィレにの史料は所在が不明であったため、以下のような段階を経て史料を探り、入手した。①まずフランス国立図書館の手稿史料室に、ダンジヴィレ関連の蔵書目録があることが分かったので、入手・調査した。これは革命時に没収された書籍の目録で、1500 以上のタイトルが記載されていたが、刊行年が近年に偏っていたため、別の史料も存在する可能性を考えた。②ダンジヴィレの最終的な亡命先である現ドイツ・ハンブルクの文書館で関連史料を調査したが、有力なものは見当たらなかった。③王室建造物局はヴェルサイユにあったため、ヴェルサイユ地区の史料を所蔵すると考えられるイヴリーヌ県文書館にて史料調査を行った。ここで書籍以外も含むダンジヴィレの膨大な財産目録を探り当てた。④ダンジヴィレの亡命後も夫人はパリに留まり、同地で亡くなっているため、パリ国立古文書館にてダンジヴィレ夫人関連の史料を調査し、財産目録を発見した。

(2)上記(1)で明らかになり、美術館政策に影響を与えたと考えられる歴史書（プルタルコス『英雄伝』、メズレー『フランス史』、エノー『フランス年代記』、ヴェリー『フランス史』など）をフランス国立図書館にて調査した。上記(1)に採録されている版と同じもの、もしくはなるべく近い版を選び、奨励作品の場面と照らし合わせ、テキストの内容、および挿絵がある場合は造形面も含め、調査・分析した。

(3)1793 年 8 月 10 日にルーヴル宮に開館した美術館の展示作品を精査した。展示作品のリストについては、美術館委員会(Commission du muséum)の議事録、ならびに出版されたカタログ(1793)から得た。それらの作品について、時代別、流派別、作家別、主題のジャンル別、来歴別の分類を試み、展示作品の構成について分析を試みた。また、それらの作品の実見調査・資料調査および写真撮影を、パリ・ルーヴル美術館、同美術館絵画部門資料室をはじめ、フランス国内各地の美術館（ヴェルサイユ、フォンテーヌブロー、アンボワーズ、シャルトル、リール、ディジョン、マルセイユ、トゥール、トロワ、ルアン他。一部、ドイツの美術館を含む）で行なった。

(4)革命政府下の美術館開設に関わる議論を、議会議事録（*Archives parlementaires*）と記念物委員会（Commission des monuments)、美術館委員会（(Commission du muséum)）の議事録から調査・分析した。すでに出版されている議事録に加え、必要に応じてフランス国立古文書館で一次史料も参照した。

(5)同時代の人々の反応を探るために、各回のサロン展の批評を掲載した定期刊行物（*Mercure de France*、*L'année littéraire*、

Mémoires secrets、*Journal encyclipédique* など）と個別の批評パンフレット、同時代人のメモワール等の一次史料を、フランス国立図書館、INHA 国立美術史研究所図書館、一橋大学附属図書館、日本大学藝術学部付属図書館等にて調査した。調査に際しては、各種美術批評を集めた Collecton Deloynes を活用した。

(6)関連する研究文献を調査した。それらは大別すると、以下のようなものである。①作品の図版と情報を得るためのカタログ類（各画家と彫刻家のカタログ・レゾネ、美術館所蔵作品カタログ、展覧会カタログ、サロン展出品目録等)、②18 世紀フランス史（アンシァン・レジーム期および革命期）の研究文献、③18 世紀フランス美術（美術行政、美術コレクション、流通、リュクサンブール宮ギャラリー、王立絵画彫刻アカデミー）に関する研究文献、④革命期の美術政策関係の文献。

４．研究成果

本研究で得られた成果について、以下、項目ごとにまとめる。

(1) アンシァン・レジーム期の「ナショナル」な主題の美術作品

ルイ 16 世治世下のルーヴル美術館計画の一環として、美術館のための作品が新たに注文された（「奨励制作 travaux d’encouragement)）。そこに含まれる「ナショナルな主題 sujets nationaux」の作品、すなわちフランスの歴史上のエピソードと偉人について、選定基準と造形上の特徴として、①道徳的なメッセージ性のある場面、および有徳の人物の選定（基準としての「徳」)、②身分、信仰に無関係な人物の選定、③サロン批評における一致した評価による画家の選定と造形表現の選択および排除、といった側面が明らかになった。また、フランス史に題材を採った作品は、この時期に人気のものであり、「奨励制作」以外にも見られたが、これらの作品についても、場面の選定と造形表現に「奨励制作」と共通する特徴が認められることが明らかとなった。

(2)美術館構想の主導者たちの知的関心

「ナショナル」な主題の流行を促した奨励制作では、絵画の主題の選定を王立絵画彫刻アカデミー院長で王付主席画家のピエールが、彫刻の主題を王室建造物局総監ダンジヴィレ伯爵が主に担当した。この二人の着想の背景となりうる蔵書目録と財産目録の調査から、当時、版を重ねて広く読まれたエノー、メズレー、ヴェリー、プルタルコスなどの歴史書を所有していることが明らかとなった。その原本に近い書籍を参照し、記述内容および挿図と、二人が手紙等で言及している注文方針や実際に制作された作品との間に一定の類似性を見出されたため、これらの書物が奨励制作の主題の選定に一定の影響を与えた可能性が考えられる。また同時代のアカデミー・フランセーズや地方アカデミーで開催されていた偉人称讃コンクールの主題との重複、および百科全書派のフィロゾーフらの思想との親近性も確認した。

(3)1793 年 8 月 10 日の展示内容

1793 年 8 月 10 日のルーヴル美術館（共和国美術館）開館時の展示作品カタログの調査から、先行研究でも指摘されてきた、18 世紀美術の排除によるアンシァン・レジーム色の払拭という政治的意図が確認された。だがその一方で、否定したはずの同体制の下で、とりわけダンジヴィレによって獲得された作品が多く含まれ、展示方法もアンシァン・レジーム期の富裕層によるコレクション展示室方式を継承していることも明らかとなり、旧体制を超克する新体制という政治性は必ずしも徹底されていないのではないかという新知見を導き出した。また宗教画が多く見られることは、教会財産の没収という革命の成果を強調する意図があったかもしれないが、主題のジャンルとしてはきわめて伝統的であり、新規性に欠けることは否めない。その点で、美術館の開館が革命の理想を具現し、国民の新たなナショナル意識（ナショナル・アイデンティティ）を強化したと考えることは難しい。この時点での美術館の政治的機能は限定的であったと言わざるを得ない。

(4)革命期の美術館関連委員会の議論

すでにアンシァン・レジーム期にほぼ固まっていたルーヴル美術館構想は、革命政府の下でさまざまな議論があり、一部に否定的な意見も認められるが、王権停止の翌日には美術館委員会が組織され、開館に向けた具体的な準備が始まった。しかし、すでに没収財産の管理のために設置されていた記念物委員会との間で、とくに作品の移管に関わる事柄について、両委員会の管轄範囲は必ずしも明確に区分されておらず、両者の対立や個人レベルの人間関係の影響もしばしば見られ、革命の理想の実現に向けて一丸となって取り組むというイメージからは遠い内容であった。当初の予想に反して、この記録から展示物の選定や、開館時の展示方法の選択等について、具体的な根拠を知ることはできなかったが、革命の過程と美術政策との関係が必ずしも直接的に結びつけるものではないことが分かった点はきわめて重要である。ここからも、上記(3)と同様に、美術館の開館によるナショナル・アイデンティティ創出への寄与は、当初の想定よりも限定的なレベルに留まっていた可能性が指摘できる。

また、これまでの先行研究では注目されてこなかった修復や版画についての議論が多くなされていることは、美術館＝質の良いオリジナル作品を展示すべき場という、今日のイメージの形成に繋がっており、美術館のあり方を考える上で見逃すことができない問題である。この点については、今回の研究では十分にフォローできなかったため、今後の課題としたい。

(5)革命期に制作された美術作品

1791 年から 1799 年までのサロン出品作品目録を調査し、主題のジャンルを中心に分析してみると、物語画が激減して肖像画と風景画が増えること、フランス史の主題がほぼ姿を消し、革命の事件の記録に取って替わること、また称讃すべき偉人として革命の英雄のほかに、ルソー、ヴォルテールが頻繁に作品化されていることが確認された。ここから、美術における「ナショナル」な主題の内容が、アンシァン・レジーム期とはまったく変質していることが明らかとなった。

(6)18 世紀フランスの美術における「ナショナル」意識の変遷（まとめ）

フランス美術における「ナショナル」な意識は、美術館の前身として 1750 年に開設されるリュクサンブール宮ギャラリーに端を発するとみなすことができる。ここでは「玉座の間」と名付けられたフランスの美術家の作品、とりわけルイ 14 世治世下に王立絵画彫刻アカデミーで活躍した画家の作品のみを集めて展示しており、流派としての「フランス派」が強く意識されていた。これは、「偉大なる世紀」を称讃すべきものととらえる歴史意識の反映であると同時に、フランスで生まれ、対外的に「フランスの様式」として人気を博していたロカイユ美術を否定し、美術の「正統な」伝統を継承する（と自負する）「偉大なる様式」を、フランス美術のアイデンティティの核に据えようとする意識の現れである

アカデミーによるサロン展の開催が定着し、フランスの美術家による作品をまとめて定期的に見る機会が現れることで、「フランス派」の存在が誰の目にも明らかになった続くルイ 16 世期には、今度は作品の主題の選択に「ナショナル」な意識が認められるようになる。神話や宗教、古代の物語が主流を占める中で、数は限られるが、フランス史のエピソードを題材とする作品が登場するようになる。これは過去のフランス史の出来事を取り上げている点で、当世の国王や高位聖職者、軍人などの事績を記録し、後世に伝える類いの作品とはまったく異なる。新しいフランス史の主題は、歴史書の刊行や諸アカデミーにおける偉人の称揚、歴史を題材とした演劇作品の流行といった文化現象を背景として生まれた。このようなフランスの歴史に対する公衆の意識を美術館計画に採り込み、美術館を共通の記憶を創造する場に仕立てようとした。

ところがフランス革命の過程では、過去、とりわけアンシァン・レジームは否定の対象となり、フランス史の主題は姿を消す。替わって登場するのは、フランス革命の過程で生じた諸事件を記録した作品と、そこで活躍した英雄たちの肖像である。過去の偉人で作品化され続けるのは J・J・ルソーとヴォルテールであるが、これは彼らの思想が革命の精神に合致するものとして注目されたためであり、革命の英雄としての称讃である。革命政府下で実施された国家注文制作においても、革命の出来事がテーマに指定されており、革命の成果を積極的に保存・継承しようとする意識が認められる。

翻って革命期の美術館の開館準備に注目してみると、18 世紀フランスの作家による作品が、ごくわずかな例外を除いて排除されたため、アンシァン・レジーム末期に制作されたフランス史の主題の作品も美術館に入ることはなかった。展示作品は国有化されたフランス全土の美術品の中から選定されるが、美術館委員会の議論の中でとくに重視さたのは宗教画、それも従来の国王コレクションにある作品ではなく、財産国有化によって新たに聖堂や修道院などから接収されたものであった。展示方針として宗教画重視ということが明示されているわけではないが、作品の移管の実態から、この点は見逃すことはできないように思われる。

また革命期に新たに制作される作品を図像学的側面から分析してみても、たとえ主題が革命の事件であっても、それを表すのに用いられるのは、伝統的な宗教画や神話画で慣習となっていた構図であり、アレゴリーである。アンシァン・レジーム期、とりわけ 18 世紀に軽視されがちだったこうした図像的な伝統を復活させることを、古典主義への回帰、すなわちより「正統」に近い「偉大なる伝統」への回帰と考えれば、革命の政治的意図と合致すると解釈することもできよう。だが実際には、美術館委員会の議論でも制作者の側でも、そのような積極的な意識は感じられない。逆に新たな様式やシステムを打ち出した画家ダヴィッドや画商ルブランらは、少なくとも革命初期には敬遠すらされている。ナショナル・アイデンティティの形成にきわめて大きな影響力を持つはずの美術館という場に限っていうならば、そこで公衆の目に供されたのは、革命の結果として国民のものとなったフランスの宝ではあったが、その内実は前世紀から評価が定まっていた宗教画をはじめとする伝統的な絵画であった。それらの作品は、アンシァン・レジーム期の富裕層によるコレクション展示室と同じく、時代と流派が混在する方式で展示された。すなわちルーヴル開館時に示されたのは、革命の成

果、「悪しき過去」の部分的な否定、「正しい伝統」への部分的な回帰の三点である。

美術界において、制度面でも様式面でも数々の新規な試みが認められる 18 世紀を否定した革命期の美術行政は、短期間で斬新な方策を生み出すことは叶わなかった。革命政府の狙い通り、旧体制が成し遂げられなかった美術館の開館という大事業を新体制が達成した。その意義は大きい。しかし、以上のような開館時の実態から、革命の精神に基づくナショナル・アイデンティティを創出するという、美術館の政治的メディアとしての役割は限定的であったといわざるを得ない。その後の展開の中で、展示内容には変更が加えられていくものの、今回の結論は、美術館の開館を旧体制の否定という一側面のみからとらえる従来の解釈に再検討を迫るものである。さらに、革命の過程と美術政策および作品の制作との関係は必ずしも直接的なものではなく、慎重な検討が必要であることも明らかとなった。

以上のような、従来とは異なる結論が出たことは、テキストと図像史料の双方を多角的に分析するという方法を採ったためと考えられる。したがって本研究の手法と結論は、狭い意味でのフランス革命史研究はもちろんのこと、広く歴史研究全体、および美術史研究全般にとって参照対象となりうるものである。現段階では、本研究の成果の取りまとめと公表は部分的なものに留まっているが、今後、各領域で広く参照されうる媒体に学術論文を発表していくことで、本研究への注目度を高めるとともに、各専門家の意見を得て、今後の研究に繋げていきたいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

1. 田中　佳「ラ・フォン・ド・サン＝ティエンヌ『考察』の研究（2）―物語画の衰退―」(査読無)、『聖学院大学総合研究所紀要』、聖学院大学総合研究所、第 55 号、2013 年 3 月、415-440 頁 (http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4682)

2. 田中　佳「公共美術館の文化史的起源をめぐる考察」(査読無)、『総合文化研究所年報』、青山学院女子短期大学総合研究所、第 20 号、2012 年 12 月、117-134 頁 (http://www.agulin.aoyama.ac.jp/opac/repository/1000/12902/)

3. 田中　佳「ラ・フォン・ド・サン＝ティエンヌ『考察』の研究（１）―出版の背景―」（査読無)、『聖学院大学総合研究所紀要』、聖学院大学総合研究所、第 54 号、2012 年 12 月、267-284 頁 (http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4721)

4. 田中　佳「ルーヴル美術館創設計画における奨励作品の複製版画」(査読無)、『聖学院大学総合研究所紀要』、聖学院大学総合研究所、第 53 号、2012 年 9 月、277-310 頁 (http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?id=AN10210652-053-277)

5. 田中　佳「フランス革命前夜における美術行政と公衆の相関―ダンジヴィレの『奨励制作』(1777-1789)を事例として―」(査読有)、『西洋史学』、第 242 号、2011 年 9 月、38-56 頁

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 1 件）

1.江藤光紀・荻野厚志・田中 佳編著『美を究め美に遊ぶ－芸術と社会のあわい』東信堂、2013 年 7 月、全 282 頁。(論文「1793 年 8 月 10 日、ルーヴル美術館の開館」、140-153 頁)

６．研究組織

(1)研究代表者

田中　佳（TANAKA Kei）

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・准教授

研究者番号：70586312